



TITLE:

<批評・紹介>前満州の開國と日本 稲葉岩吉著

AUTHOR(S):

今西, 春秋

CITATION:

今西, 春秋. <批評・紹介>前満州の開國と日本 稲葉岩吉著. 東洋史研究
1936, 2(1): 80-82

ISSUE DATE:

1936-10-13

URL:

<https://doi.org/10.14989/145568>

RIGHT:

い。しかしこんな擬古的な名稱を用ゐないでも、六朝では石柱といふ名^{後漢書、水經注}、が立派に行はれてゐるのである。朱希祖、「駁晉溫嶠墓在幕府山西說」は陳迺勳『新京備考』等の溫嶠墓幕府山西にありとする説を駁したものである。

要するにヴェテランは堅實だけに新味がなく、あくまで文獻考據であり、新進はなほ立場が曖昧で方針がたゞず、多少見當のついたことも、それをつきつめて論究してゐない。殊に造形美術としての取扱ひは甚だ不充分である。この點支那の美術考古界一斑を反映してゐるやうに思へる。この書も文獻考證は朱希祖の手をつけられたゞけに永く南朝陵墓研究の準據となるであらう。しかし遺蹟の調査は甚だ不充分で、寫眞の復成はセガランの圖錄に遠く及ばぬ。セガランもまだ圖錄だけしか公表されず、關野博士等の結果もまだ分刊されてゐないが、遺蹟遺物の調査はこれ以上にでゝあるとも推察されるのでその公表を鶴首するとともに支那新進學者の折角の努力をこの方面に期待したい。

(水野清 一)

前滿洲の開國と日本

稻 著 岩 吉 著

昭和十一年六月、京城熊平商店發行、菊判六一頁、非賣品。

著者の所謂前滿洲とは開國期の清朝を指して言ふ。著者の同方面に關する幾多精緻なる好研究に就いては、學界已に周知して剩さない。本書を目して此等諸研究の成果とし、總論とすることは妥當であらう。

著者は、本書の主旨とする所を冒頭して、現滿洲帝國は現代日本の助力によりて成立したものであるけれども滿洲に於ける日本の力の顯はれは、今日に始まつたものでなく、前の滿洲即ち清朝開國の際も同様であつた。たゞこれらの次第が從來の史書に表面化せなんだといふにとゞまるであらう、われらはこの一大事に對しては、更めて意識すべきであると強調し、次ぐ本論に於いて、清の太祖の興起に對し、我等日本人が、如何に我等日本人自らの意識せざる作用を及ぼしたものであるかを、明確な史實に立脚して論述した。

我等自らに殆んど意識されない乍ら、清朝の興起、從つて當時東亞大局の上に最も重大なる作用を及ぼしたも

のは、實に我が豊臣秀吉の七ヶ年に亘る半島用兵のことに他ならなかつたのである。秀吉のこの半島用兵に就いては色々の議論がある。或るものは窮兵黷武に過ぎずといひ、或るものは、國威を海外に宣揚したといふが、著者は、かゝる論議を闘はずよりも、寧ろこの空前の大役の東亞の大局の上に如何に影響したものであるかを考へることこそが、一番切實であると見る。著者は、秀吉用兵の結果は、宣戰の當事者たる秀吉も、又善後を策した家康も、嘗て想像だにせざりし方面に影響した。即ち其は従前東亞大陸の主人公たりし明國の大伽藍一時に搖動し、これを契機に清の太祖の勃然と蹶起するといふ、明清交替の大局に密接不離に影響したものであることを考究しなければならぬと見る。

思ふに清朝の祖先を以て、單に長白山中の一酋長に過ぎないとするものあるは當らず、その家系、その門地の歴然たるものありしは争はれない。かれ女眞の傳統的の血液中に、仍ほ大金の昔ながらの自負心の往來するあつて禁じ得ざりしものゝ存したことも推想に難くはない。が然し、何と言つても久しきに亘つて不振微弱に陥り、内部の統一を缺いて、居所すら一定する所なかりし一田

夫漢に過ぎなかつたことは事實である。一田夫漢ヌルハチは果して何を根據としてかくは蹶起したか。何を恃んでかくは征明の旗幟を掲げたか。——かく著者は自問し曰く、我が秀吉の七年戰役こそは、ヌルハチの明敏を以てして、明國は大木でこそあれ、それは獨活の大木に過ぎないものであることを逸早く洞察せしめたものであると。而して尙、詳見すれば、遼東の鐵嶺に家居して女真人間に絶大の威權を擅にした李氏一味の碧蹄館に於ける大敗戰こそは、女真人の對明認識を一變した時であつた、鐵嶺李氏の内幕はこの一戰によつて完全に暴露された、女真人が成梁の死と共に蹴起したと見られることは牽強ではあるまいと著者は考へを推す。

かく清の太祖の興起に、日本が重大な役割を演じてゐたからには、日本自體の無意識は兎も角、太祖に取つては、東亞の盟主大明を崩壞の第一歩にまで導いた日本は看却し得ない存在であり、その力量に就いては重大な關心がなければならなかつた筈である。もとより著者はこの點を明瞭にすることを忘れない。著者に従へば、同じく七年役の清正オランカイ討入りこそは、女真人をして我が日本の力量を最も直接端適に認めしめたものであ

つた。事大外交に訓練された朝鮮がこの間の機微を見脱す筈はなかつた。日本の用兵によつて最も甚大な損害を被つたものは言ふ迄もなく朝鮮ではあつたらうが、又よく日本用兵の威武を女真人間に放送して、後來永く女真人の心膽を脅かし、その已れに對する壓迫緩和に利用し成功したのも朝鮮であつた。かく見來るとき、我が秀吉の半島用兵は對外的に如何に莫大な影響を與へたか、同時に東洋に於ける日本の存在は如何に儼然たるものであつたかを了知するであらうと。

清朝を興したものは日本である、といふ著者の史論こそは、かくて、常の所謂春秋の筆法を以て目さる可きものとは遙に類を異にするを見る。

而して最後に著者は、かゝる冥々裡の歴史事象を透觀して、蓋し滿鮮一帯の民族は、われら日本とは凡そ同一系の血縁であつて、言語にも、風俗にも、將た文化的事象にも、相共通するものがあり、さういふ内容的のものであるまいかと結んでゐる。蓋し道破し得て妙である。

初めにも言ふが如く、著者の博き史學の中にも、特に清初史に於いてその精妙なるものがある。當事者たる秀

吉にも、又家康にも、更に其の後三百年の長き、今日に至るまで誰人によつても意識せられざりし重大な歴史事實が、著者の史眼に俟つて美事に道破せらるゝに到つたことを我々は祝福せずに居られない。而して又我々の最も大いなる安易さを以て本書に就き得る所以の一斑は、本書の總論的敘述が實に著者の幾多精緻なる研究の上に於て始めて成るものであることを知るが故である。

尙史林第十九卷第二、三號誌上に掲載された浦廉一氏の「明末清初の鮮滿關係上に於ける日本の地位」なる一篇は多くの點に於いて稻葉博士の本著と所論を同じくするものがある。清初史研究論文中、又出色の力作であり、私は斯篇を顧るの遅かりしを遺憾とする。讀者の併讀せられんことを希望する。

(今 西 春 秋)

原 商

小 島 祐 馬 著

昭和十一年八月、東亞經濟研究二十週年記念號
(二十卷三號)

山口高等商業學校内に東亞經濟研究會が創立され、その機關誌東亞經濟研究が創刊されたのは大正六年の事である。同